

時事雑感

私共の製品は、サイズは豊富ですが大人用がほとんどで、私が国産初で開発した心筋梗塞の救急救命で用されるIABPバルーンカテーテルの小児用「めだか」があるくらいでした。

2010年に小児循環器の第一人者である昭和大学病院の富田英先生に私共のカテーテルが何か役立てないか尋ねると、透析患者の痛んだ血



東海メデイカル
プロダクツ会長 筒井 宣政

管を修復するカーブ型のPTAバルーンカテーテルが小児の先天性疾患の屈曲病変に使えるとアドバイスをいただき、早速小児用として販売を開始しました。

その富田先生から「海外製1社しかなくて改良がされず、私が望む機能をもったものがないので作ってくれないか」と依頼されたのが赤ちゃ

小児用カテーテルを世界に

んの肺動脈弁狭窄症を治すカテーテルでした。心臓から肺へ逆流を防ぐための弁が何らかの理由で狭まってしまうのが肺動脈弁狭窄(さく)症です。昨今の医療技術の発達で心臓を開くことなく、バルーンが付いたカテーテルを太ももから血管の中に挿入し、弁までバルーンを持っていく方法で治療できるようになりまし

た。

そんな危険も少ない便利なカテーテルをなぜ各メーカーが開発に足を踏んだのかと言えは、小児用先天性の治療はマーケットが小さく、採算が取れない分野だったからです。

こうした状況下で開発をスタートしたのですが、赤ちゃんの血管は大

けて小児用として世界一細いカテーテルを開発しました。

この小児用カテーテルは年間約170例しか使われません。170人の赤ちゃんの命を救うために貢献出来たことには満足していませんが、企業の投資回収という面では赤字となり、頭を抱えています。そこで私は日本だけではなく世界で売ることを決断しました。世界にまとまった数量が出れば、利益はなくても安定供給が可能だからです。

人に比べ細く繊細なので大変難しい取り組みでした。しかし「一人でも多くの生命を救いたい」という会社の基本理念の下、社員一丸となつて安全性に徹底的にこだわり、富田先生に御指導をいただきながら2年かけて完成させました。医療機器は厚生労働省の許認可が必要のため、さらに3年の期間を要し、合計5年か

私共だけでなく、富田先生がアジア各国の小児循環器関連の学会に赴き、学会発表やカテーテル治療を現地でを行うなど尽力していただきました。その他多くの先生方にもご協力いただいた結果、現在はベトナム、フィリピン、タイ、イランへ輸出して、何とか安定供給できています。一人でも多くの全世界の赤ちゃんを救えたらと思っています。